

当資料は、『甲賀市史第7巻』より抜粋しました。  
『甲賀市史第7巻』は、絶賛発売中です。



販売価格: 1冊3,500円

## お問い合わせ先

歴史文化財課 市史編さん室

所在地/〒520-3393甲賀市甲南町野田810番地 甲南庁舎3階

電話番号/0748-86-8075 FAX/0748-86-8216

E-mail/ [koka30109000@city.koka.lg.jp](mailto:koka30109000@city.koka.lg.jp)

63 鮎河城跡

64 高尾城跡



図167 鮎河城跡・高尾城跡位置図

土山町鮎河は、南北朝時代、南朝方の拠点の一つであった。建武五(延元三・一三三八)年に南朝方の唐崎侍従、頼宮肥後弥久郎は五辻宮守良親王を奉じて「鮎河城」に立て籠もつていたが、北朝方の佐々木秀綱の攻撃を受けて同年二月には落城した(『太平記』)。

その後再び勢力を盛り返した頼宮肥後弥久郎は、四月に鮎河の「鷹尾城」に立て籠もつたが、再び落城して伊勢に逃けている。この「鮎河城」と「鷹尾城」は、建武五年四月の小佐治兵衛三郎

土山町鮎河小字大谷

土山町鮎河小字大谷

国氏の軍忠状(『佐治文書』)にその名が見られ、一次史料で存在が確認される城館である。

鮎河城は、土山町鮎河のうち東野集落の東、鮎川に面した標高四四四メートル、比高約一〇〇メートルの尾根の先端に位置する。

曲輪Ⅰ(主郭)は、長さ

約二五メートル、幅一〇メートルの長方形で、南北に高さ五〇センチほどの低い土塁を築いている。その外側には幅約一〇メートル深さ約四メートルの堀切を入れている。堀切の先は堅堀として落としている。曲輪Ⅰの南側の尾根先端部には不明瞭な四段の削平地がある。

曲輪Ⅰより北に約三二〇メートル離れた尾根上に幅約八メートル、深さ約三メートルの堀切aがある。そこからさらに六〇メートル離れた位置に幅約六メートル、深さ約三メートルの堀切bがあり、その東斜面は堅堀状

に落としている。

なお、鮎河城の西の山腹には黒川氏の菩提寺であった正等院の跡地と、多くの中世文書を伝える黒河家の墓所があり、現在も削平地が残っている。さらにその下には「殿下」という地名も伝えられている。

『甲賀郡志』によると、西麓の水田に城門の礎石が残るとあるが、現在は確認



写185 野洲川西岸からみる鮎河城跡・高尾城跡

することはできない。地元ではこの一帯を鮎河城伝承地として石碑を建て公園として整備されている。今回確認された背後の城とのセツト関係を考えると、ここが黒川氏の初期の居館（いぐん）と考えられることもできる。

高尾城は、高尾山と号する地藏堂の北の裏山に位置する。「太平記」に見える「鷹尾城」は、従来明確な位置が不明であったが、この地藏堂の裏山の城がそれである可能性が高い。

城は、標高四〇八メートル、比高約六〇メートルの山上に位置



写186 野洲川からみる鮎河城跡



写187 南西からみる高尾城跡



写188 高尾城跡 南側腰曲輪

し、曲輪Ⅱ（主郭）の東西をそれぞれ二本の堀切で遮断（しやんとん）している。曲輪Ⅱの南側は緩斜面のためか、横堀をめぐらし、そこから二本の堅堀（かたほり）を落としている。北側は急斜面であるが、小さな腰曲輪（こせきりか）があり、そこに非常に短い畝状空堀群（うねじょうくわくほりぐん）が見られる。

「鮎河城」「高尾城」は文献上では南北朝時代の城であるが、現況の遺構からは戦国期の城館と判断するのが妥当であろう。史料とは遺構の年代が一致しないが、戦国期に黒川氏が再び使用して改修したと考えられる。

（石川）

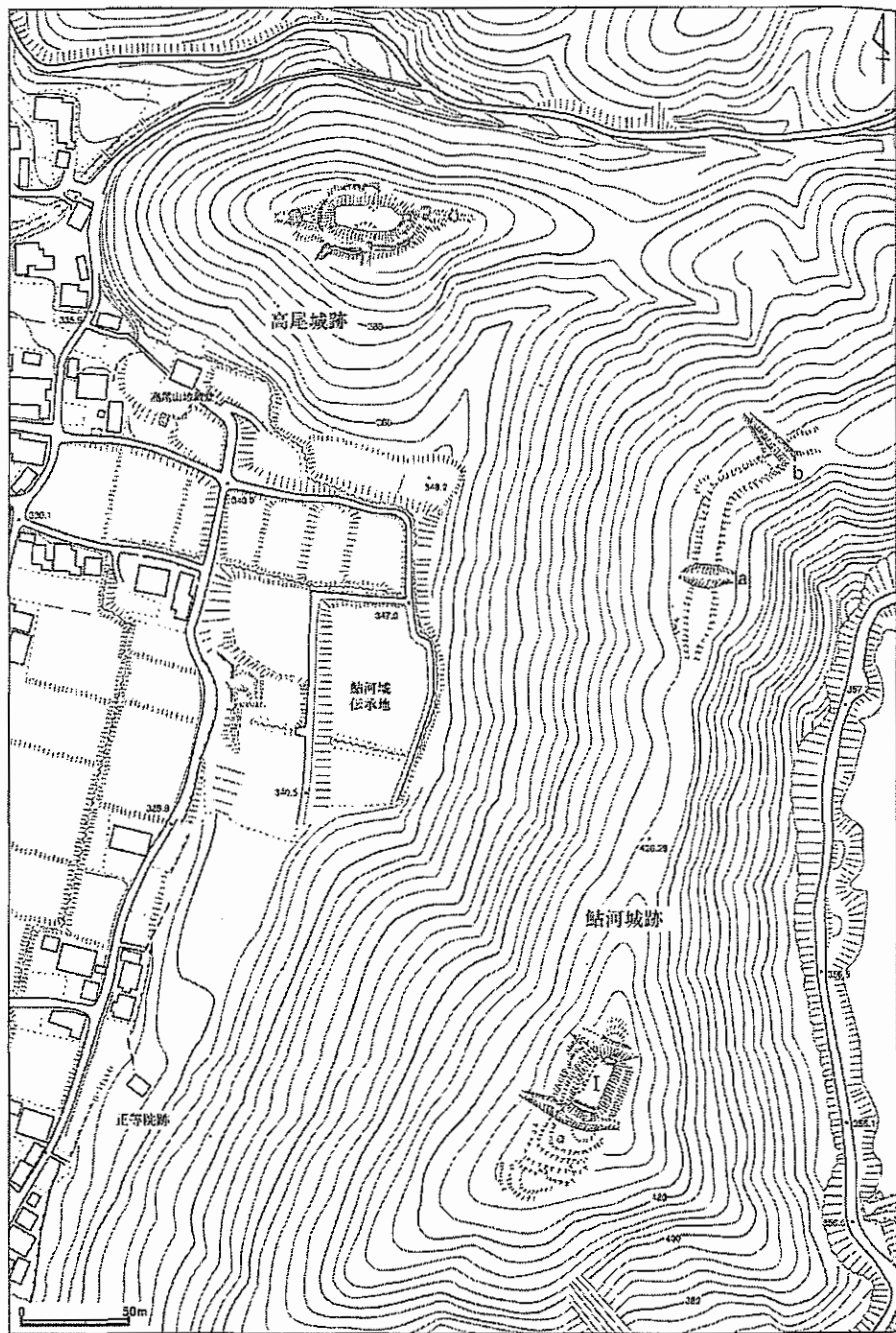


図168 鮎河城跡・高尾城跡概要図

(石川浩治作図)